

成果報告書

記入日 2023年 10月 29日

| | | |
|--|-----------------|--|
| フリガナ：(イワモト ヒロフミ) 氏名：岩元 恕文 | 渡航先国名 トルコ共和国 | 留学先の所属機関：ボアズィチ大学 帰国後の所属機関：九州大学人文科学府 |
| 研究テーマ：近代トルコにおけるユダヤ人アイデンティティの変容：知識人と共同体の活動に注目して | | |
| 研究期間：2021年 7月～2023年 6月（2年0ヶ月） | | |
| 研究成果（概要）オスマン帝国末期からトルコ共和国初期のユダヤ人アイデンティティでは、「民族」が重要な問題であり続けた。帝国末期のオスマン・シオニストは、民族意識と愛国心は両立可能だと訴え、同胞に社会への公民的統合を求めた。対して共和国初期にはユダヤ人トルコ主義者が、ユダヤ人をどれ程「トルコ民族」とするべきかを巡り、ユダヤ共同体とムスリム・トルコ人とを巻き込んで議論を展開した。 | | |
| 研究成果（詳細） 【研究目的】 多民族・多宗教のオスマン帝国（1299頃～1922）は、領内に多数の非ムスリム（ユダヤ人とキリスト教徒）を抱えていた。1908年に青年トルコ人革命が起こると、帝国では「諸民族の統一」の名の下に政治・言論の自由化が進んだ。公共圏では帝国の将来像を巡って活発な議論がなされ、ユダヤ共同体でもシオニストが党派として強い存在感をもった。しかし、1911年から始まる約11年間の諸戦争の中で「諸民族の統一」は放棄され、帝国では国民統合の凝集力としてトルコ主義が急速に台頭した。更に11年の戦争の中で、ムスリム・トルコ人は非ムスリムを敵視するようになり、キリスト教徒に対する虐殺や強制移住が起きた。そして1922年に帝国は滅亡し、翌年には国民国家のトルコ共和国が建国されたのである。上述の時期にユダヤ人は、民族主義の台頭、相次ぐ戦争や兵役と総動員、民族・宗派間対立の激化、そして共和国による苛烈なトルコ化政策に直面した。彼らは、分離独立を試みたキリスト教徒とは対照的に、あくまでトルコ社会への統合を試み続けた。本研究の目的は、20世紀初頭のトルコにおけるユダヤ人知識人やユダヤ人共同体が、「民族」を巡りいかなる知的営為を行ったかを明らかにすることである。 【トルコ共和国で実施した研究活動の概要】 上述の目的を果たすために、筆者はトルコ共和国にて以下の活動を行った：①実用トルコ語の習得、②現地の史料・史跡に関する全体像の把握、③調査、④研究会に参加し、研究者との意見交換やディスカッションにより研究内容を深化させる。 ①に関しては、現地到着後にボアズィチ大学の指導教員トルガ・ジョラ准教授と面談を行い、外国人向けトルコ語授業を受講して実用トルコ語能力を向上させた。また②に関しては、ジョラ准教授より各種公文書の所蔵先とアクセス方法のアドバイスを得た。更に1990年代よりトルコ・ユダヤ人史を研究してきたルフアト・バリに、現地のユダヤ人関連史料について尋ねた。そして、ラディーノ語（ユダヤ人の民衆語）文献の入手が困難であることがわかったため、代わりにトルコ語や古語のオスマン・トルコ語、フランス語の文献・史料の収集を優先することにした。加えてトルコ・ユダヤ教徒博物館を定期的に訪れ、館長ニスヤ・アロヴィ等と情報交換を行った。これにより、ユダヤ共同体が出版する各種書籍や、現地にあるシナゴグ（礼拝所）を始めとする宗教施設・遺産へのアクセス方法等を確認できた。③に関しては、まずボアズィチ大学図書館やドイツ系研究機関のオリエント機関を訪れ、先行研究の収集と読解を進めた。次に大統領府オスマン文書館、アタテュルク図書館、イスラーム研究センター等にて史料調査を行い、次いで実際に宗教施設・遺産を調査した。④に関しては、コロナの流行が収まってからの参加となった。具体的には、2022年の英国アナトリア研究所とボアズィチ大学による国際学会「占領下イスタンブール:都市の政 | | |

治・文化・社会、1918–1923 (Occupied Istanbul: Urban Politics, Culture and Society, 1918-1923)」という国際学会や、イスタンブールやイズミルのユダヤ共同体による文化イベント（「欧州ユダヤ文化記念日」や「イズミル・セファルディム文化祭」）に可能な限り参加し、研究者を含めた参加者との意見交換やディスカッションを行うことで研究内容を深化させていった。

上述の研究活動から得られた成果は、大きく以下の二点である。

【研究成果1：オスマン・シオニストの帝国観と民族観】

第一に筆者は、青年トルコ人革命後のオスマン・シオニストの主張を、彼らのフランス語機関紙『暁 *L'Aurore*』より検討した。革命後のユダヤ共同体に登場したシオニストは、パレスチナでの独立国家建設を志向せず、代わりにユダヤ人民族としての自覚を持つよう同胞に訴え、ヘブライ語の普及といった文芸復興活動に力を入れた。シオニストは多数の機関紙を発行し、自らの主張をオスマン社会の幅広い層に向けて訴えた。それらの機関紙の中で最も有名なものは、ユダヤ人ジャーナリストのルシアン・シュート Lucien Sciuto が創刊し、主筆を務めたフランス語機関紙『暁』である。『暁』は1909年から1919年まで発行され、反シオニストのユダヤ人知識人と激しい論争を繰り広げたことで知られている。『暁』は帝国のリング・フランカであるフランス語で書かれており、ユダヤ人のみならず帝国の諸民族全般に向けて書かれていたのは間違いない。先行研究では多民族・多宗教の公共圏に向けて、『暁』がユダヤ民族主義をどのように打ち出していたのかが触れられてこなかった。したがって筆者は、革命後の「諸民族の統一」路線の中で、『暁』がユダヤ民族と帝国に関していかなる主張をしたのかを検討した。

1909年6月25日の第一号の「私達の綱領」より、『暁』はテオドール・ヘルツルの言葉を引用して、自らが「ユダヤ人新聞」だということを誇りたいと述べた。更に『暁』は、オスマン・ユダヤ人の利益を第一に考慮することを方針として定めた。これらは、シオニストとしての『暁』の立場を明確に示している。それと同時に『暁』は、自らの綱領が何よりもユダヤ人と他の帝国諸民族との友愛のために存在するとも述べた。更にこれに続く記事ではユダヤ人にオスマン軍への志願を促すなど、『暁』は常に愛国的な姿勢を見せている。すなわち、『暁』はユダヤ民族意識の保持と祖国への愛国心とは両立できることを訴えていた。

シオニズムと「諸民族の統一」との融和を図ろうとする『暁』の路線は、ユダヤ共同体における反シオニストとの論争の中でより強く現れるようになる。反シオニストのユダヤ人知識人は、シオニズムがオスマン・ユダヤ人やユダヤ教とは全く無関係であり、かつ「諸民族の統一」を乱す危険な存在だと喧伝していた。中にはシュートに対する露骨な人格攻撃さえあり、彼をユダヤ教から逸脱しユダヤ人性が欠如した人物だと揶揄した。これに対し『暁』は、シオニズムはユダヤ民族主義 (nationalism juif) ではなくユダヤ教 (Judaïsme) それ自体であるため、帝国への忠誠心と両立可能であると主張した。更に『暁』は、同化ではなく自らの起源と系譜を尊重することが、他民族への尊重につながるのだと主張した。これに加えて、反シオニストのユダヤ人知識人を反ユダヤ主義者、あるいは出エジプトにおけるエジプトのファラオと同類だと攻撃した。この後も『暁』は、シオニズムと愛国主義の融合という路線を維持し続けた。例えばバルカン戦争時の1912年11月5日に、親シオニストのフランス語日刊紙『青年トルコ *Le Jeune Turc*』は、ユダヤ人若者の愛国的活動を称える『暁』の記事を転載している。『暁』は、ムスリム・オスマン人への同化といった民族的・文化的統合には反対したものの、ユダヤ人にオスマン国民として活動や軍への積極的な志願といった公民的統合には賛成するという姿勢を取り続けていたのである。

第一次世界大戦中、オスマン・シオニズムには新たな動きが見られた。総力戦と銃後の困窮により、オスマン・ユダヤ人の間には、帝国政府とそれを支持するユダヤ共同体指導者層に対する激しい不満が生まれていた。加えて1917年に、ユダヤ人の民族的郷土の樹立を支持するバルフォア宣言が発表されると、彼らの間でシオニズムへの期待が高まった。ラディーノ語のフォークロアを収集したエリ・シャウルによると、宣言後にユダヤ人の間では次の歌が流布したという。「全てのユダヤ人 *judios* が共にある、私達に与えられたシオンの地 *Siyon* で。全てのユダヤ人は共に生きる、私達に与えられたシオンの地で。パレスチナ万歳！私達の祝福された土地。もうユダヤ人は苦しまない。ついに私たちは解放される」(Shaul 1994: 128)。大戦の敗北後、ユダヤ共同体の混乱に乗じて、遂にオスマン・シオニストがイスタンブール・ユダヤ共同体の権力を奪取した。そして彼らは、1919年から22年にかけて、同池の共同体を運営し続けた。当時のラディーノ語著作を検討したデヴィ・メイズによると、かろうじて存在しているオスマン帝国を完全に見限り、パレスチナでの独立国家建設のみに希望を見出す人々さえいたという (Mays 2017)。しかしトルコ共和国の建国により、シオニズムは違法とされ公の場から姿を消した。かつてのオスマン・シオニストは国外へ逃亡するか地下活動に従事する以外に道はなくなり、更にユダヤ共同体も政府の厳しい指導下に置かれ自律性を大幅に失った。

【研究成果 2：共和国初期のユダヤ人トルコ主義者によるトルコ化論】

第二に筆者は、1928年1月から4月にかけて発生した「市民よ、トルコ語を話せ！（*Vatandaş, Türkçe Konuş!*）」運動における、二人のユダヤ人トルコ主義者による言論活動を調査した。本運動は、非トルコ語話者に対してトルコ語使用を要求した、共和国初期の最も大規模なトルコ語普及運動である。当初こそ全ての非トルコ語話者を対象にしていた本運動であったが、次第にユダヤ人を主な標的としたものへ変貌していった。ムスリム・トルコ人の間に非ムスリムへの強い敵意が存在し、更にユダヤ人のトルコ語能力が乏しかったからである。トルコ語の新聞ではユダヤ人に対する誹謗・中傷が行われ、更に公共の場での暴力事件さえ発生した。ユダヤ人は自らのトルコ化に向けた展望を、トルコ世論に示す必要に迫られたのである。この状況に対し、ユダヤ人を代表する知識人のテキンアルプ Tekin Alp とアヴラム・ガランティ Avram Galanti が、ユダヤ人をいかにトルコ化すべきかを論じた著書を発表して世論に応えた。前者はユダヤ人でありながらトルコ主義のイデオログとして活動し、後者はイスタンブール大学の教授であった。二人はトルコ主義者として論壇で長年活動しており、ユダヤ共同体の運営にも関与していた。以上を踏まえて筆者は、二人のユダヤ人トルコ主義者が、世論に対してどのようなトルコ化論を展開したのかを検討した。

ユダヤ人への攻撃が最も激しかった1928年3月、テキンアルプは『トルコ化 (*Türkleştirme*)』を出版し、ユダヤ人のトルコ化に向けた10の方針を「十戒」として提示した。彼はユダヤ人に対して、自らのアイデンティティを完全の放棄し、言語から精神に至るまで徹底的にトルコ化するように求めた。他方でガランティは、運動後の7月にムスリム・トルコ人とユダヤ人との歴史的な友好を訴える『トルコ人とユダヤ人 (*Türkler ve Yahudiler*)』を出版し、次いで10月には運動の名称にちなんだ『市民よ、トルコ語を話せ！（*Vatandaş, Türkçe Konuş!*）」を出版した。彼は、ユダヤ人がこれまでトルコ化に失敗してきた歴史的な理由を説明し、ユダヤ人への理解と配慮を求めた。その上で彼は、政府に対して教育によるユダヤ人のトルコ化を要請した。

一見対照的な二人の著書であるが、双方ともにオスマン帝国末期にユダヤ人が生み出した愛国主義に基づく歴史観・他民族観を引き継いでいた。すなわち、二人はユダヤ人がスペインからオスマン領に移住してきた1492年を重視し、ユダヤ人とムスリム・トルコ人との歴史的紐帯を強調した。更に二人は、キリスト教徒を否定的に記すことで、ユダヤ人をキリスト教徒から差別化しようとさえ試みた。一方、二人の主張の違いは、思想的な差と出版時期の差から生み出されたと考えられる。トルコ主義を信奉し運動時に著書を出したテキンアルプは、トルコ主義者の要望を忖度したトルコ化論を組み立てた。これに対してガランティは、トルコ化の問題をトルコ語普及に限定し、運動が沈静化した後に著書を発表した。

二人のユダヤ人トルコ主義者に対して、ユダヤ共同体の指導者層は対照的な反応を見せた。彼らは『トルコ化』に激しく反発したが、『市民よ、トルコ語を話せ！』やガランティの活動は絶賛したのである。このため運動が沈静化すると、『トルコ化』は早々に忘れ去られてしまった。つまり、ユダヤ共同体の指導者層は、二人のトルコ化論に賛否を示すことにより、間接的に自らの要望をムスリム・トルコ人に伝えようと試みたのである。

【全体のまとめ】

オスマン帝国末期からトルコ共和国初期におけるユダヤ人アイデンティティに関し、最も重要な問題が「民族」である。帝国末期のユダヤ共同体では、アイデンティティにて民族的要素と公民的要素のいずれかをより重視するべきかを巡り、シオニストと反シオニストとの間で論争が起きた。両者共に「諸民族の統一」やユダヤ教を尊重する態度を取りながら、自らの正統性を多民族・多宗教の公共圏に向けて発信した。そしてシオニストは、同胞に「ユダヤ民族」としての覚醒を求めつつ、同時にオスマン社会への公民的統合も要請したのである。しかし共和国建国後は、シオニストが表舞台から退き、ユダヤ人が取り得る選択肢は減少した。そして、当時のユダヤ共同体で問題となったのが、ユダヤ人が自らのアイデンティティをどこまで「トルコ民族」に同化するべきなのかである。ここにおいて、ユダヤ共同体とムスリム・トルコ人をつなぐ存在として、ユダヤ人トルコ主義者が重要な役割を担った。彼らはトルコ世論へ向けてトルコ化論を発信することで、ユダヤ共同体とムスリム・トルコ人との仲介役を果たそうとしたのである。

- Mays, Devi. 2017. "Recounting the Past, Shaping the Future: Ladino Literary Representations of World War I." In *World War I and the Jews: Conflict and Transformation in Europe, the Middle*. Edited by Marsha L. Rozenblit & Jonathan Karp. 201–221. New York: Berghahn Books.
- Shaul, Eli. 1994. *Folklor de los judios de Turkiya*. Istanbul : ISIS Press.



留学中の生活・研究でのトピックス

筆者が留学した時期のトルコでは、新型コロナの流行、ウクライナ戦争、大地震、相次ぐインフレ、そして総選挙という様々な出来事・事件が起きた。このため、各種ルールや手続きの方法が頻繁に変わり、適応するだけでも大変だったというのが正直な感想である。特に、長期滞在する上で必須の滞在許可証の発行や更新には、多くの複雑な手続きが必要であり、毎回憂鬱な気分になったことを覚えている。しかし、これらの経験は同時に、

帝国末期から共和国初期にマイノリティや移民が感じたであろう、困難や孤独感を少しでも理解する助けになった。それと同時に、生活や各種手続きを行う上で、トルコ人や外国人の友人と相互に協力する機会が留学中に何度もあった。この経験も、多民族・多宗教社会にて、人々がいかに共存してきたのかを感覚的に理解する上で役に立った。

そして、留学において他の何よりも強く心に残っているのは、実際にトルコのユダヤ人と会って、自分の専門について話をしたことである。場合によって



は、例えばガランティの遠い親戚といった、自分が研究している人物の一族出身者に会うことさえあった。これまで文献の中でしか知らなかった人々に会って対話をするにより、筆者はマイノリティを取り扱う自らの研究が持つ社会的責任の重さ、研究者としての職業的良心の重要性を改めて認識した。それと同時に、自身の研究の持つ意義、そして研究を進める楽しさや喜びを、これほど強く意識したことは今まで一度もなかった。このような強い感情を伴う経験は、長期間の留学以外には決してありえない。今後研究を進めていく中で、何度も今回のトルコ留学の経験・記憶を思い返すことになるだろう。

今後の社会貢献

筆者は帰国直後より、留学より得られた成果を公表することで社会貢献を果たそうとしてきた。

第一の成果は、2023年度9月21日～23日に開催された国際学会、2023年度ドイツ・トルコ学大会 (Turkologentag 2023) にて、「オスマン・シオニズムの将来に向けたネゴシエーション：第二次立憲政期における『暁』のユダヤ民族観と愛国主義 (Negotiation for the future of Ottoman Zionism: *L'Aurore's* view of Jewish ethnicity and patriotism during the Second Constitution Period)」という形で発表した。

第二の成果は、東洋学研究所の権威である学術雑誌『東洋学報』の105号(2023年)に査読論文「トルコ共和国初期のユダヤ人と「市民よ、トルコ語を話せ！」運動」という形で発表した。

以上に加えて、筆者は帰国後より九州産業大学の国際文化学部にて、講義「イスラム文化論」を非常勤講師として担当している。この講義では、イスラム文化の基礎を指導しながら、同時に留学時にトルコで見聞きしたユダヤ人、そしてアルメニア人やギリシア人といったキリスト教徒の宗教や文化についても適宜伝えている。この講義で筆者は、異文化と向き合う難しさと楽しさを、留学時の経験を踏まえてわかりやすく学生達に伝えようと試みている。

今後とも、留学で得られた成果を学術分野と教育分野の双方で還元していきたい。史料や文献の読解から得られた成果を国内外の学会や学術雑誌に発表し、同時に大学での講義や一般向けの文化セミナー等といった場で留学の成果を公表していくことで、幅広い社会貢献を果たしていきたいと考えている。